



TITLE:

学内図書の相互利用を中心に - 誌上討論 -

AUTHOR(S):

CITATION:

学内図書の相互利用を中心に - 誌上討論 -. 静脩 1966, 3(4): 4-5

ISSUE DATE:

1966-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36357>

RIGHT:

学内図書の相互利用を中心に

—誌上討論—

大学図書館間の相互協力が提唱され、一部実行に移されている時代に、同じキャンパスにある部局の図書の相互利用が、円滑に行なわれていないのは奇妙なことである。先ごろ部局図書掛長の会合でも、この相互利用について種々論議され、また本誌前号の寄稿においても、期せずして学内図書の有効な利用が要望されていた。この際現場の図書館員としてもこの問題をどう考えているか、誌上討論の形で意見をよせて頂いた。

相互利用をはばむものは何か

A 我々図書職員は研究の援助として、図書資料を収集し、整理し、研究者にすみやかに提供すべく不断の努力を続けている。研究者が要求している図書資料が、他の学部にある場合にそれを利用することが簡易にできないのが現状である。何故かといえば貸出規程が各学部ごとにまちまちであること、また各学部の図書資料はその学部割り当てられた予算で購入されたものであるから、他学部の研究者、学生に利用させることは、その学部の研究者が喜ばないという面もあり、それが相互利用を困難にしている。

B 相互利用を困難にしている原因の一つとして、利用者側にも問題がある。本館の現状をいえば、借用者の半数近くは期限までに返却せず、第1回の督促状により未返却者の半数がやっと返却するにすぎない。5回以上の督促や電話連絡もたびたびであり、毎月督促状を150枚も書かねばならず、無駄な労力に掛員が泣かされている有様である。

C 在籍者の学外転出に対しては、自学部生には卒業証書と引換えに借用図書の返還を義務づけることができるが、他学部生に関してはその異動の通告がなくて動静がつかめず宛先不明で返送さ

れてくる督促状や、督促しても梨のつぶての場合もあり、せっかく便宜をはかってもこちらが大変迷惑する。各教務掛と図書室との密接な連絡が必要だ。これなくしては徹底した管理は困難である。

どうすれば相互利用は円滑に行なわれるか

A 貸出手続または利用規程の不統一に問題があると思う。この規程を一本化すれば相互利用が可能であると考えられる。付属図書館が主体となり、本学共通の規程を作成されたい。

しかし一挙に本学共通の規則を作って、相互利用にふみきるといっても、種々具体的な問題が生じる。この問題の具体的解決案としてまず考えられるのは、各部局の図書利用規則の付則として、「他の学部、研究所の教官 および 学生も、所定の手続のもとに利用することができる。」という一項を設けたならば、相互利用も案外可能なのではないか。

D 付属図書館へ申し込めば、どの部局の図書も利用できるというように、付属図書館が図書貸借の窓口となつてはどうか。

E 本館では法・経両学部学生閲覧室がないため、その閲覧事務を代行しているが、これは特殊事情によるものであって、すべての部局におよぼすことは、距離の点、時間の点、部局図書室の受付体制その他を考慮しなければならないが、その点どのように考えればよいのだろうか。将来の理想像としては、学内に人文科学系、社会科学系、自然科学系、医学系の専門図書館を設け、図書も建物も組織も統合すれば、相互利用、収書の合理化、情報活動、人手の問題も解決に近づくと思われるが――。

A 貸出された図書資料は用済み次第すみやかにこれを回収せねばならぬ。そのためには利用者の自覚の念と、各部局の教務掛あるいは庶務掛との横の連絡を必要とする。そうでなければ円滑な図書資料の運営は望めない。

C そこで一つ提案したいのは、学報のような形式で、月刊または学期刊で転籍・転職予定者の

情報を、中央図書館で総括して各図書室へ流してはどうであろう。他方、部外貸出圖書の責任はもちろん借出者個人が負うべきだが、同時に研究奉仕機関という役割上、各図書室はその借出責任を持つべきではないだろうか。そのためには常にどの研究者、学生がどこの図書を利用しているかを知っておかねばならない。潤滑油としての中央図書館の働きを期待したい。

学問研究の進展のために

F 最近全学で購入される資料（特に洋雑誌）には複本が非常に多い。同一学部内に数部、時には十数部の複本があるのは、実際に利用ひん度が高くても必要なこともあろうが、中には教室間の横の連絡なく購入することが原因の一つになっていることもあろう。相互利用を活発に行ない、もっと横のつながりを強めてあまり利用ひん度の高くない複本の購入を避け、他の重要な図書にふりむければ、予算面でも無駄が省け一石二鳥と思う。

D 私のところの場合、付属図書館のカードを検索しての利用者も多いのであるが、閲覧室の図書も、学生の利用がほとんど不可能な教官研究室の図書も、付属図書館のカードには区別がされていないので、利用者にも迷惑をかけているようだから、その区別を明りようにしてもらいたい。

E 付属図書館では中央館として、早くから全学総合目録を備え付けているが、これは図書が1部局・1研究室のみの利用にとどまらず、広く全学的に利用されることを予想して作られたものである。この目録には不備な点もあるが、これを検索して得た図書が利用できないのでは、何のため

の総合目録かと利用者は疑問と失望を覚えるであろう。館員としても苦心の目録の利用価値が半減するようなことは不本意であるし、利用者たる学生の失望を見るに忍びない。

京都大学付属図書館報告書中の「図書の専用化傾向」の項にも「図書館の蔵書は原則としてその利用が公開されるところに価値がある」とし、部局における図書の専用化の実状を究明し、「図書の専用化傾向は、総合研究の高まりと矛盾するものであって、この傾向の進行をそのまま是認し続けるならば、やがてそれは大学における研究の進歩に障害となるであろうことを恐れる」と述べられている。

G 本川東北大学総長も同様の図書館通信に1文をよせて「日本の大学の図書館の在り方は従来の考え方の影響もあって、未だ充分近代化の姿になっていない」とて、教授の個人蔵書的な考え方や、教室毎に利用の道が閉ざされて、結局ほしいものは自分で買わねばならず、図書費がかさんだこと、しかし個人で買う図書ぐらいで本当のよい研究はできないことなどあげられ、「今はそうしたことは少なくなりつつあるが、図書館の運営・利用においては封建性は敵である」と断言されている。

大学が研究と教育の場である以上、利用者も節度を守り、図書が特定の人だけのものに終わらないことを願ってやまない。

参加者 奥山哲（教育）・竹中千恵子（法）・北村明美ほか（教養）・本館編集委員

（この他の方からも図書館のあり方について御意見を頂いたが、紙面の都合で次に割愛させて頂いた。おゆるしをこう。）

学生に対する
図書開放状況
(昭和40年調査)

	関	貸		関	貸		関	貸		関	貸		関	貸
図	○	○	教	○	●	電	○	○	化	○	●	数	○	●
文	●	●	養	○	●	気	○	○	工	○	●	学	○	○
教	○	○	人	○	●	土	○	○	高	○	○	物	○	○
育	○	○	文	○	●	木	○	○	分	○	○	理	○	○
法	○	○	研	○	○	機	○	○	子	○	○	宇	○	○
経	○	○	研	○	○	械	○	○	航	○	○	宙	○	○
医	○	○	結	○	○	資	○	○	空	○	○	地	○	○
薬	○	○	研	○	○	源	○	○	原	○	○	球	○	○
農	○	○	食	○	○	冶	○	○	子	○	○	化	○	○
	○	○	研	○	○	金	○	○	核	○	○	学	○	○
	○	○	基	○	○	工	○	○	衛	○	○	物	○	○
	○	○	物	○	○	化	○	○	生	○	○	動	○	○
	○	○	研	○	○	建	○	○	工	○	○	植	○	○
	○	○	数	○	○	築	○	○	数	○	○	物	○	○
	○	○		○	○	石	○	○	理	○	○	地	○	○
	○	○		○	○	油	○	○	工	○	○	鉦	○	○
	○	○		○	○	化	○	○	合	○	○		○	○

○ 全学学生が利用できる ○ 他学部学生は利用できない ● 全学学生が利用できない
(紹介を要するなど条件付のものではないものに記入した。遠隔部局は省略)